たまのよこやま

発行
㈶東京都生涯学習文化財団
東京都埋蔵文化財センター
〒206-0033
多摩市落合1—14—2
☎ 042-373-5296

東京都埋蔵文化財センター報 No.48 平成12年3月15日 http://www.tef.or.jp/maibun/

とうきょう親子ふれあいキャンペーン

▲昔の人の火おこしを体験しました！

▲土器や石器はどのようにして作られたのかな？

太古の彼方に

総務課長　桐山　靖彦

数年前、公園の管理業務を担当していたことがある。その公園は、入口までの約二キロが直線の道路で結ばれており、三方は海に面していた。キャンプ場や海釣り施設等多くの施設を抱えた大規模な公園であり、利用者も大変多く、特にシーズン中の土日は、これでもかというほどの利用者があった。

この時期は、疲労感と幾分かの充実感をもって、午後八時過ぎの最終バスで帰宅への途につくのが常であった。

その際、バスの最後部の席から振り返ると、まっすぐ伸びた道路の両側のライトが、一直線に滑走路のように漆黒（しっこく）の闇に向かって伸びていた情景を今でも鮮明に覚えている。

幻想的であり、一種妖しげでもあり、その先は、現実ではなく、なにか永遠の彼方へとつながっているのではと思ったりしたものである。

最近、奈良県明日香村の「酒船石遺跡」や埼玉県秩父市の「小鹿坂遺跡」と、埋蔵文化財に関する記事が新聞の一面を飾ることが続いた。

埋蔵文化財に携わる者の一人として、多くの方が、埋蔵文化財に対する深い思いを持ってくれることが嬉しいと感じるとともに、これらの遺跡をとおして、太古の彼方に想いを馳せているのでは、と思っている。

遺跡だより㊻

空から見たNo.72遺跡

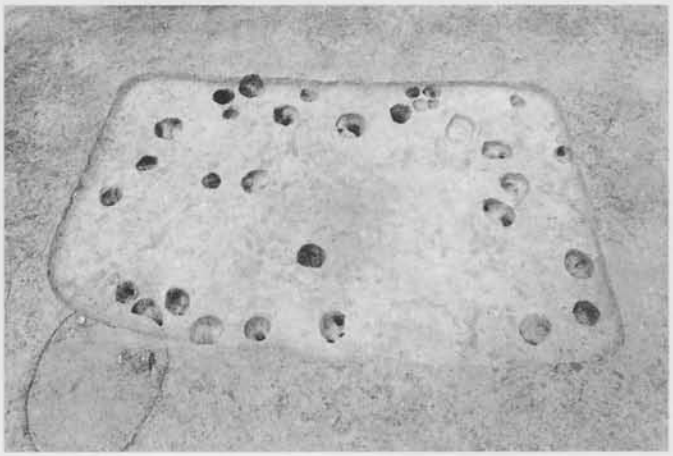
今回紹介します多摩ニュータウンNo.72遺跡は、多摩ニュータウンの街並みが広がる八王子市堀之内に所在し、新宿より約40分の京王相模原線の堀之内駅より北へ徒歩15分程の距離にある遺跡です。地形的には多摩川の支流である大栗川と寺沢川に挟まれた台地に立地する遺跡です。

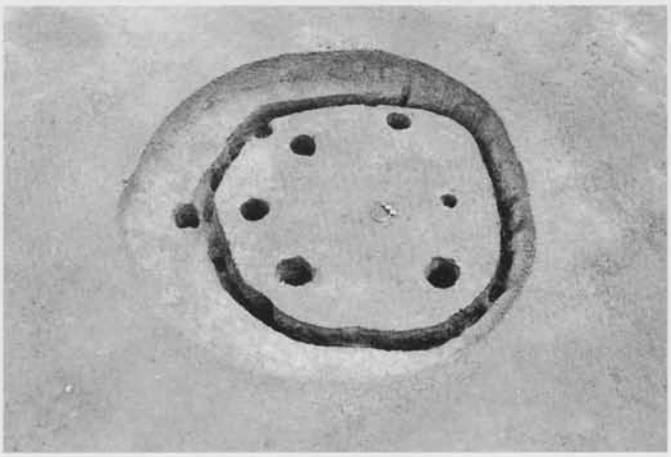
No.72遺跡は昭和62年より発掘調査が開始され、今回が第7次の調査となります。本遺跡は前回までの調査で、縄文時代中期（今から約5000～4000年前）の住居跡が大量の土器・石器等の遺物とともに204軒も発見され、当時、この地に大規模な集落が営まれていたことで有名になりました。今回の調査でも、縄文時代に関する重要な二つの成果がありましたのでここに紹介します。

ひとつ目は縄文時代中期の集落に関するものです。今回の調査は集落の西側の部分に該当し、32軒の住居跡が発見されました。前回までの東側の調査部分と合計すると230軒を超える規模となります。これほど大規模な集落跡は全国的にも少なく、都内では今のところ最大級の規模の遺跡です。また、今回の調査でほぼ集落の全域を発掘したことになり、No.72遺跡の中期の集落は、東西に伸びる楕円形の環状集落を形成していたことが確実となりました。

なぜ円ではなく楕円形の集落になったのかについてですが、本遺跡の立地する台地は、平坦面が南北に幅が狭く東西に長く伸びているので、縄文人がこの地形を有効的に利用した結果によるものと考えられます。

ふたつ目は過去6回の調査では見つかっていなかった、縄文時代前期の始め（今から約6000年前）の集落跡が発見されたことです。住居跡は15軒見つかりました。この時期の集落跡が発見されることは非常にまれで、もし、発見されてもせいぜい1遺跡で2～3軒ぐらいの住居跡が見つかる程度のものですが、今回の調査で15軒もの住居跡が見つかったことで、当時としては非常に大きな集落が営まれたことが判明しました。


前期始めの住居跡


中期の住居跡

これは、全国的に見てもめずらしく、今回の調査での一番の成果といえましょう。前期の始めの集落が見つかるとはまったく予想していなかったことで、大変な驚きでした。

中期の竪穴住居跡を上から見ると、円形を基本としているのに対して、前期の始めのころの竪穴住居跡は長方形や楕円形になります。各柱穴は中期と比べると小さくて浅く、細い柱を使っていたものと思われます。中期と前期の住居跡の違いは、写真で見ると明らかでしょう。

今回の調査によって、中期より約1000年も古くからこの地に人々が住んでいたことがわかりました。No.72遺跡のある場所は平坦な土地が広がる台地で日当たりは良好ですし、近くに大きな川や森があるので水や食料の確保にも事欠かないため、中期だけでなく前期の縄文人にも住みやすい環境だったのでしょう。

真冬の発掘現場から西の方角にふと目を向けると、うっすらと雪化粧した丹沢の山並みの向こうに、真っ白な富士山の頂を望むことができ、一時の喧騒を忘れておだやかな気分にさせてくれます。我々と同じ景色を見ていたはずの縄文人は、果たして何を想い、何を考えていたのでしょうか。

（山本孝司）

文化財講座 〈38〉

大江戸掘りもの帖～十五～

尾張藩上屋敷の御庭焼

御庭焼とは、江戸時代、藩主自ら趣味として茶器などの焼き物を作るために邸内に設けた窯、あるいはその製品のことです。尾張藩の場合、国元では御深井焼や萩山焼、東山焼（上屋敷市谷邸）と戸山焼（下屋敷戸山邸）がありました。

上屋敷の楽々園焼という名称は、邸内に整備された回遊式庭園「楽々園」に由来し、その製品に「楽二園」、「楽二園製」の刻印やヘラ書きがあるのが大きな特徴です。

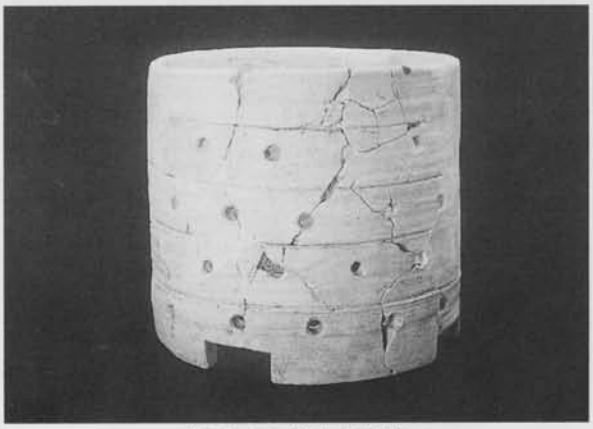
楽々園焼は伝世品の箱書きや古文書の記録から、天保年間（1830～1843）頃、十二代藩主斉荘の指導のもとで焼かれていたことが判っていますが、その詳細については不明な点もいくつか残されていました。しかし、発掘調査によって関連の資料が出土したことから、従来より、いっそうその実態に迫ることができるようになりました。

出土資料を検討した結果、製品として楽茶碗や花生け、香合などの軟質陶器（低火度焼成）や天目茶碗、銅緑釉皿などの硬質陶器（高火度焼成）の他、一部、磁器も焼いていたことも判明しました。

さらに注目すべきは製品を焼くための窯の材料や道具の陶片が確認され、それらの多くは錦窯と称される窯を構成する部材であったことです。錦窯とは主に色絵を焼付けるための窯で、外窯と内窯の二重構造になっており、内窯内に製品を、内窯と外窯の間に燃料である木炭を入れて700～800℃で焼成します。

出土した楽々園焼の資料は、楽々園焼のみならず、江戸時代の御庭焼やその技術について、今後多くの情報を我々に提供してくれそうです。

（内野　正）



復元された錦窯（外窯）

保存科学室こぼれ話（十二）

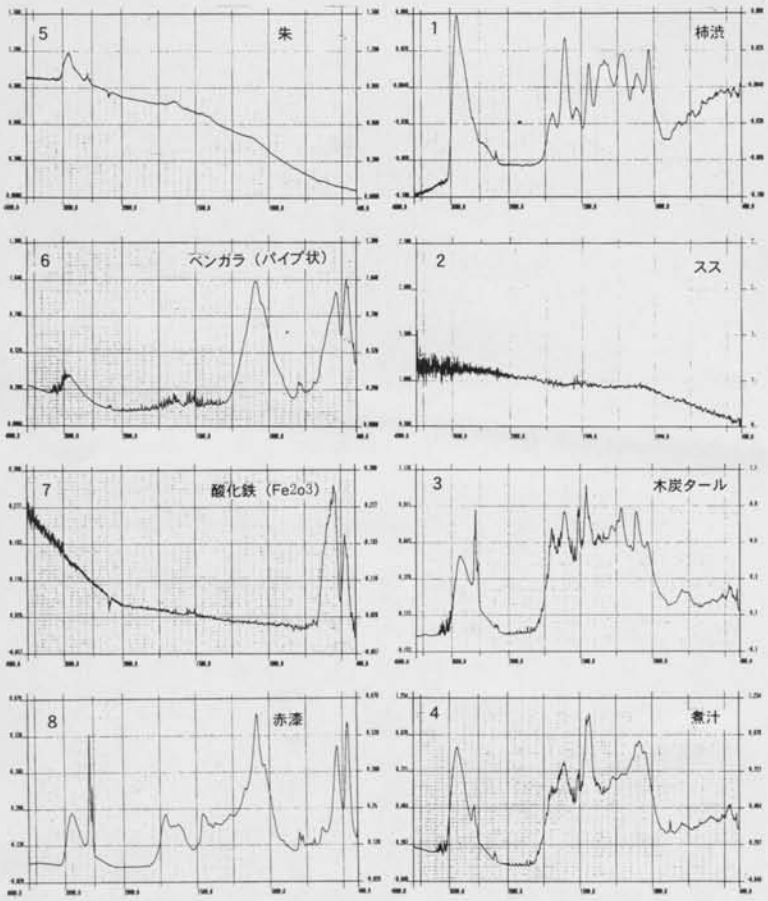
出土遺物にみられる黒色物質について(2)

前回は、漆とアスファルトのFT－IR法による測定波形を紹介しましたが、遺物にみられる黒色物質は、他に柿渋やスス（炭素）、木炭タールや炭化煮汁（調理残渣）などがあります。これらを肉眼で区別することは、非常に困難ですが、FT－IR法による分析である程度の分類が可能になりました（図1～4）

なお、漆に赤色顔料を混入して赤漆を作っている場合は、朱（硫化水銀）、ベンガラ（パイプ状物質）、酸化鉄（工業薬品）の波形（図5～7）が漆の波形にプラスされます。

図8は、丸の内三丁目遺跡で出土した赤漆を測定した波形です。

これで見ると漆の波形に図6・7の酸化鉄の波形（475と550）付近が重なり、赤色顔料の母材が酸化鉄であることがわかります。（門倉武夫）



文化財講演会

今年度の第四回文化財講演会は、11月13日（土）に、福島県文化センターの寺島文隆氏による「鉄　古代の製鉄と鍛冶」の講演を行いました。

内容は、東日本最大といわれる福島県内原町市周辺の古代製鉄遺跡群などについてです。映画は、「和鋼風土記」を上映しました。118名の参加者がありました。

寺島文隆氏の講演

第五回は、平成12年1月19日（水）。当センターの松崎元樹副主任調査研究員による「馬　古代の牧場－馬を飼い馬具を作った時代－」の講演と、映画「北の牧馬」を上映しました。127名の参加者がありました。

第六回は、2月9日（水）。当センターの竹花宏之副主任調査研究員による「木　古代の木器生産」の講演と、映画「奥会津の木地師」を上映しました。139名の参加者がありました。

親子ふれあいキャンペーン

11月27日（土）に小・中学生の親子を対象にした新たなイベントを行いました。（巻頭写真）

午前「体験　古代人のくらし」
小学1～4年生と保護者
午後「石器・土器づくり」の見学
小学5年生～中学生と保護者

午前の部には、30組の参加があり、復元住居内での古代人の生活や屋外での火おこしを体験しました。親子が一体となって火おこしに挑戦した結果、全員見事に成功をおさめました。

午後の部では、石器と土器づくりの作業を見学しました。

大型の石器づくりでは細かい石の破片が飛び散りますから、近づいたり離れたりして見学し、土器づくりでは、細かい作業に身を乗り出して熱心に見学しました。

秋の一日を過ごした親子の皆さん、家に帰ってからも楽しい会話が弾んだことでしょう。

分室だより

川口分室　八王子市北西部の多摩川の支流、川口川右岸に位置する東内入東（とうないいりひがし）遺跡一万八千㎡を調査しています。出土遺構は、尾根部に集中して縄文時代の陥し穴土坑が約400基検出されています。これだけの出土例はこの地域で始めてのことです。

川口川に面する平坦面では、中近世の溝などが多数見つかっています。

調査は、安孫子昭二調査研究係長・小松眞名・岩橋陽一両副主任調査研究員が担当しています。

東内入東遺跡の近景

東京文化財ウィーク

10月23日（土）、当センター製作の映画「森と縄文人」、「古代史発掘」を上映しました。「森と縄文人」は、八王子市堀之内のNo.796遺跡の泥炭地の調査を記録した映画です。当センターの「縄文の村」は、この遺跡で発掘された樹木や花粉などを参考に、自然環境を復元したものです。

一方、「古代史発掘」は稲城市大丸の窯跡群の調査を記録した映画で、出土した国分寺瓦などは、平成10年に都の有形文化財に指定されています。当日は、この国分寺瓦も展示し、説明会を行いました。

多摩ニュータウン No.72遺跡の現地説明会

11月17日（水）に、多摩ニュータウンNo.72遺跡の見学会を開催しました。同遺跡は「遺跡だより56」に紹介したように、縄文時代前期始め、及び中期の集落跡です。206名の考古学ファンが熱心に見学されていました。

多摩都市モノレール開通

平成12年1月10日より立川－多摩センター間が開通しました。

多摩北西部方面から、当センターへのアクセスが便利になりました。

東京都遺跡調査研究発表会

12月5日（日）に中央区日本橋公会堂にて開催されました。当センターからは、小林裕副主任調査研究員が汐留遺跡（陸奥仙台藩伊達家上屋敷庭園跡）の調査成果を発表しました。

R100
古紙100％配合の再生紙を使用しています。